

コンサート音響の機材史

赤字…自社開発機材

1971~1974

スピーカーシステム

JBL / オリジナル2-Wayシステム (4560+2220 / 2350+2440)
低域フロントロードホーン4560+2220、高域ラジアルホーン2350+2440の2-Wayシステム

Phase Linear
出力700W。事業スタート時、主力のパワーアンプとしてJBLオリジナルシステムに使用していた。フロントパネルの大きなメーターはオーディオファンの憧れであった

Shure / VA300-S, VA301-S
トーンノイズ型スピーカーシステム



JBL / オリジナル3-Wayシステム (4560+2220 / 2350+2482 / 2350+2440)
これまでの2-Wayシステムに、中域ラジアルホーン2350+2482を加えた3-Wayシステム

JBL / オリジナル4-Wayシステム (4560+2220 / 2350+2482 / 2350+2440 / 2405)

これまでの3-Wayシステムに、スーパーツイーター2405を加えた4-Wayシステム

Shure / PM300



『無線と実験』誠文堂新光社 刊
1975年1月号より転載

1975

JBL / オリジナル5-Wayシステム (4520+2205 / 4560+2220 / 2350+2482 / 2350+2440 / 2405)

これまでの4-Wayシステムに、超低域バックロードホーン4520+2205を加えた5-Wayシステム。JBLオリジナルマルチウェイシステムの完成形



1976

ヒビノ / HH3000

ヒビノ初のオリジナルスピーカー。JBL15インチ×2にハイパボリック(=双曲線)ホーンを組み合わせた低域フロントロードホーンスピーカー。「HH」はヒビノ・ハイパボリックの略。スーパーランプ公演でMartin Audio社(イギリス)が持ち込んだ「Martin Bin」を参考に、フレア率を変更してハードロック音楽に求められる低域特性に特化。1976年9月の紫公演でデビューし、その後ウィッシュボーン・アッシュ、エアロスミス来日公演などで活躍。のちのBINCOシステム(HB2000)の開発につながっていく



1977

ヒビノ / HM-154

ヒビノオリジナルモニタースピーカー。JBL15インチウーファー×2、2インチドライバー×1、スーパーツイーター×2で構成。Tycobrahe社(アメリカ)が持ち込んだスピーカーをもとに製作。ドラム用モニターやサイドフィルに使用した



1978

ヒビノ / HB2000 BINCOシステム

ヒビノを代表するオリジナルスピーカーシステム。HH3000(Low)とHighの間の帯域を埋めるためのLow-Midシステムで、JBL10インチ×8で構成。「HB」はヒビノ・ハッフルの略。ポプ・ディラン初来日公演に際し、HH3000システムに加えてボーカルの帯域をコーンスピーカーで埋める要請があり開発。Martin Audio社(イギリス)の「Martin Bin」と似たシステムであることから、「Binの子ども」という意味でBinco(BINCO)と命名



BINCOシステム



HB2000

AMCRON / DC-300

Crownの代名詞といえるパワーアンプのレジェンド。世界初のDC(直流)アンプで、低音の抜けがすばらしい。BINCOシステム用に導入。その後、JBLオリジナルスピーカーシステムのパワーアンプもすべてDC-300に入れ替わっていく

1979

ヒビノ / HM-151

ヒビノオリジナルモニタースピーカー。JBL15インチウーファー×1、2インチドライバー×1、スーパーツイーター×1で構成。「HM」はヒビノ・モニタースピーカーの略。レーナード・スキナード公演でShowco社(アメリカ)が持ち込んだフロアモニターをもとに製作。現在300台稼働中



ヒビノ / F1

ヒビノオリジナルツウボックススピーカー。JBL18インチウーファー×2のLowボックス、JBL12インチMid×2、2インチドライバー×2、スーパーツイーター×4のHighボックスで構成。Lowボックスは、HH3000で代用することもあった。木製キャビネットにFRPコーティングをした第1号機。田口製作所に製作依頼。これ以来、ヒビノのオリジナルスピーカーはFRPコーティングが続く



1980

Klipsch

ウーファーのみ導入。Lowの能率を上げるためにユニットの前面に極端に長いロードを採用。当時としては画期的。K1やK2と一緒に使用。BINCOより低音が出るため、BINCOのSub Lowとしても使った



ヒビノ / K1

Klipschのウーファーと組み合わせ使用するために製作した、FRPコーティング仕様のヒビノオリジナルミッドハイスピーカー。JBL12インチMid×1、2インチドライバー×1、スーパーツイーター×2で構成。上向きに立てると、前から見た形状が逆台形だったことから、通称「イカ」



AMCRON / PSA-2

大出力で高音質なパワーアンプ。野外コンサート時に特殊効果用の炭酸ガスに包まれて、その瞬間に半数のPSA-2がスタンバイ状態に陥る。その後、基盤が湿度に弱いことが判明し対策としてコーティングを施す。それ以後は快適に動作した

HIBINO 50th ANNIVERSARY

資料館

Speaker System

ミキシングコンソール

ヒビノ / 16chミキシングコンソール
ヒビノオリジナル16chミキシングコンソール。16in.3out.当時は16chも使うコンサートは少なかった



タムラ / TS-1201
放送用12chミキシングコンソール

Shure / VA302
パワーアンプを搭載した6chミキシングコンソール。小規模なコンサートで重宝した

YAMAHA / PM1000
YAMAHA初のPA専用16chコンソール。マトリクスが特長。1975年3月のパッド・カンパニー武道館公演でデビュー。1975年8月のワールド・ロック・フェスティバルでは3台並べて使用

YAMAHA / PM1000 (32ch)
YAMAHAに依頼し製作した、PM1000×2台の32chモデル



Soundcraft / Series 2
軽量で音質も優れていたが、出力がアンバランスのため、ノイズに弱かった。Series 2Siには周波数可変EQが搭載されていた



Soundcraft / Series 2改造ver.
Series 2のハウスコンソールをモニターコンソールに改造。日本初のモニターコンソール。グループとREMIXの選択スイッチをボリュームに改造し、モニターコンソールとして使えるようにした。REMIX×2、Cue×4にグループ×8で計14系統のアウト。キャメルの来日公演に合わせて製作。当機材とHM-151が高評価され、アーティストの受注拡大につながった

Soundcraft / Series 1S
小型のコンソール。一枚もののパネルが銀色のケースに直接入っている構造は軽量で画期的

ワイヤレスシステム

40MHz帯ワイヤレスシステム
タムラの40MHz帯ワイヤレスシステム導入



日本武道館センターライニング用設備
ヒビノオリジナル日本武道館センターステージ用ライニング設備。1973年のトム・ジョーンズ日本武道館公演に合わせて製作。8角形(内径7.5m)の鉄枠にウーファー×2、中高域ホーン、アンプを8セット設置。国内初の本格的なライニングスピーカーシステムを実現



ヒビノ / ヒビノカム
大音量の中でも聞こえるヒビノオリジナルインカムを製作。コールランプを押すと会話ができないのが欠点。当時はPAでインカムを使用すること自体画期的だった。販売も行っており、ホール設備向けにも導入されていた



200MHz帯ワイヤレスシステム
RAMSAの200MHz帯ワイヤレスシステム導入

ヒビノ / 8chキューボックス
ヒビノオリジナルキューシステム。PAに特化した可搬型。入力は8ch+2AUX。5~8chにはバンポットを取り付けて2ステレオとして使えるようにした。PAのモニターにキューボックスを使うことはまだ珍しかった



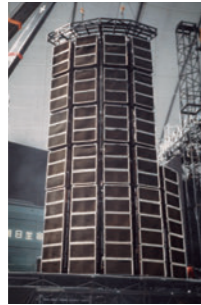
コンサート音響の機材史

コンサート音響の機材史

赤字…自社開発機材

1981

ELECTRO SOUND / TFA Turbo
JBLのユニットで構成された2ボックス、4-Wayシステム。Midフロントロードの音響イコライザーがターボエンジンの形状に似ていることからTurboを命名。初めて導入したフライングシステム。重いキャビネットは欧米人との体格の差を感じさせられた



ヒビノ / K2
K1の後継機。Mid帯域を10インチ×2ユニットに変更。JBL10インチMid×2、2インチドライバー×1、スーパーツイーター×2

1982

ヒビノ / HM-150
ヒビノオリジナルモニタースピーカー。オールFRPのボックスが特長。JBL15インチウーファー×1、1インチドライバー×1、ピエゾツイーター×2で構成



1983

ヒビノ / HM-155
ヒビノオリジナルモニタースピーカー。高音と低音が別のボックスになっている。JBL15インチウーファー×2のLowボックス、2インチドライバー×1のHighボックスの構成。海外アーティストのリクエストで大出力のウェッジが必要になり開発



1984

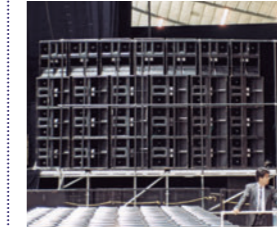
1985

ヒビノ / U1 サイドフィル
ヒビノオリジナル4-Wayサイドフィルスピーカー。15インチウーファー (E-140) ×2、12インチMid (E-120) ×2、2インチドライバー (2441) ×1、スーパーツイーター (2402) ×2で構成。機材名のUは、"utter=完全な、徹底的な"が由来。現在も稼働中



1986

Turbosound / TMS-3
イギリスから発売された、世界初のメジャーなワンボックスフルレンジスピーカーシステム。のちにユニットをJBLに交換したオリジナルバージョンに変更



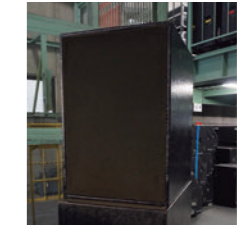
AMCRON / Micro-Techシリーズ
2Uサイズと小型ながら大出力の先駆者のパワースペック。現在も稼働中

1987

TAD
TADはパイオニアの子会社。スタジオモニター用に開発された、ベリリウム振動板を使用した超高級高域ドライバー。TMS-3の高域ドライバーとして採用するために導入したが耐入力に合わず、代わりにモニタースピーカーに使用した。現在も稼働中



Taguchi / SB-218
TMS-3の超低域をサポートするためのヒビノオリジナルサブベースキャビネット。現在も稼働中



スピーカーシステム

Speaker System

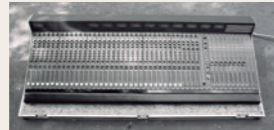
ミキシングコンソール

Mixing Console

ワイヤレスシステム

Wireless System, etc

MIDAS / PRO 04A
MIDASを代表するコンソール。ロック向けの太い音、海外アーティスト公演で多く使われた



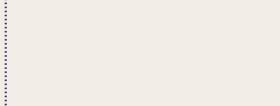
Soundcraft / Series 800
日本で初めて登場した、電子バランスを採用したコンソール。モニター仕様をラインアップしており、ハウス用とモニター用の両方を導入



Soundcraft / 800B
Series 800の後継機。VUメーターパネルが付き、見た目が大きく変化



YAMAHA / PM3000
入出力回路の電子バランス化。フルパラメトリックEQの採用。VCA搭載。筐体にアルミニウムを採用し、PM1000、PM2000に比べて軽量化を実現。ノイズの出ないコンソールだった。軽井沢スキー場特設会場で行われたジェフ・ベック、サンタナ、スティーヴ・ルカサーでデビュー



TAC / Scorpion
音質や機材の精度について賛否両論あるものの、ノイズに強く、トラブルの少ない安定感のあるコンソール



TAC / SR9000
当時は最も大型かつ重いコンソール。高音質。パッチベイがプロ機器の雰囲気大いに盛り上げた



AMEK / BCII
放送局向け、音質重視の高級小型コンソール。サブコンソールとして使用



RAMSA / ミニチュアマイクロホンシリーズ
松下通信工業 (現 パナソニック モバイルコミュニケーションズ) との共同開発

BSS AUDIO / FDS-340
TMS-3推奨のクロスオーバー。TMS-3とFDS-340の組み合わせは相性抜群。最高のブリティッシュサウンドを実現。のちに、BINCOやTFA Turbo等のシステムにも採用された。FDS-355の登場により、運用を終了した



400MHz帯ワイヤレスシステム
RAMSA、SONYの400MHz帯ワイヤレスシステム導入。RAMSA製品は偶然か意図的か、Shure SM58のヘッドが装着できた。首都圏以外で単5の乾電池が入手できず走り回った

コンサート音響の機材史

赤字…自社開発機材

1988

スピーカーシステム

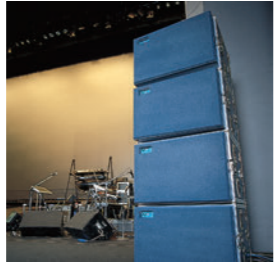
ヒビノ / NBシステム
BINCOシステムをフライングするために開発された、BINCOの後継機。3ボックス構成。15インチウーファー×4のLowボックス、18インチサブウーファー×2のフロントロードSubボックス、10インチMid×6、2インチドライバー×4、スーパーツイーター×4のHighボックス。「NB」はNEW BINCOの略



AMCRON / Macro-Techシリーズ
コンパクトかつ大出力なパワーアンプ。Micro-Techシリーズからのマイナーチェンジ。現在も稼働中

1989

Stage Accompany / Blue Box
リボン振動板高音ドライバー搭載の珍しいスピーカーシステム。特徴的な高域の抜けはすばらしかった



1990

Showco / Prismシステム
初めてフルパッケージで導入したスピーカーシステム。Showco社と業務提携し、Prismシステムの日本及びアジア地域における使用権を得る(20年契約。2009年、Prismシステムを返却)。リギング指向性コントロールのアイデアには感服させられた。現在のラインアレイ全盛期を覆すアイデアがまだ隠されていると思う



1991

1992

ヒビノ / U2 サイドフィル
ヒビノオリジナルサイドフィルスピーカー。すべてフロントロード。MidとHighの構造がU1と異なる。JBL15インチウーファー×2、12インチMid×2.2インチドライバー×1、スーパーツイーター×2で構成。エンクロージャーの構造を台形に変更。現在も稼働中



1993

Stage Accompany / Performerシリーズ
軽量・コンパクトで、取り回しの良いスピーカー。大音量を必要とするコンサートには不向きだったが、歌謡曲コンサートでは高音質を発揮した



1994



資料編
HIBINO 50th ANNIVERSARY

Speaker System

ミキシングコンソール

RAMSA / S840F
モニターコンソール。RAMSAの技術者の方々に現場の意見をたくさん汲み取っていただいた製品。ノイズ対策に力が入っており大変助けられた



BSS AUDIO / FDS-360
クロスオーバー。FDS-340の多機能な後継機。のちにTCS-804とペアで使用。FDS-355の登場により、運用を終了した

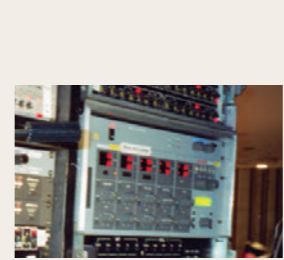
ATL / M-4084
最高級純日本製コンソール。トラブルが少なく、絶対に壊れないという安心感があり、無色透明な音、色づけない音が好評だった。現在もいつでも使用できる状態で保管している

Soundcraft / S8000
800Bの後継機として安定した人気があった

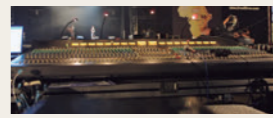


TAC / Scorpion II
Scorpionのバージョンアップモデル

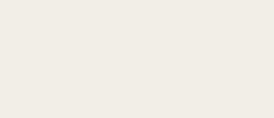
TAC / SR6000
ヒビノオリジナルのモジュールをメーカーに作製してもらった



YAMAHA / PM4000
PM3000の後継機。海外アーティストに人気があったコンソール。つまみが小さくて操作に苦労した



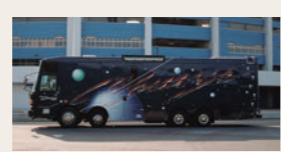
Soundcraft / SM24
48in、24outのSoundcraft初の大型モニターコンソール。拡張性があり、大型コンサートで使用した



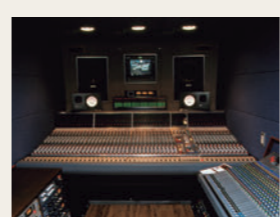
ワイヤレスシステム、その他

1991
ヒビノ / ODYSSEY
初のヒビノオリジナル録音中継車。最新鋭の録音設備を搭載。音と映像の同期や音声のデジタル化に備えた設計を行った。Tektronixのシンクジェネレーターを録音中継車として日本初導入。音と映像の同期を重視したのはウェストレックススタジオのレコーディングチームならではの。音に集中できる環境を実現するためコントロールルームとマシンルーム

をセパレート化。クオリティの高さと中継車らしからぬスタイリッシュなデザインは、全国の注目を集め、特に海外アーティストから高評価を得る。ODYSSEYは“長い冒険の旅”という意味で、呼ばれればどこへでも収録に行くという気持ちから命名。自動車排出ガス規制の関係で、初代ODYSSEYは2009年に稼働を終了



NEVE / VR48
アナログ・ミキシングコンソール。48in、48out。ODYSSEYにメインコンソールとして搭載。レコーディングコンソールとして世界最高峰だった。中継車に搭載するため、振動や埃などあらゆる環境下での稼働を考慮し、CLAROSTATとシャドールの金接点スイッチと超密封型ボリュームを採用。導入時のカスタムと継続的なメンテナンスにより、現在も接点不良やガリに悩まされることなく稼働中



McAUDI / MAD2005
高性能シグナルプロセッサ。FIRのフィルターを採用した世界初のプロオーディオデバイダー。限りなくクリアなマネジメントシステムとして、第一通信工業と共同開発。LAKEの登場により、運用を終了した

McAUDI / WAKESER
クリアなサウンドを損なわないためのオーディオ分配器。信号を分けることから、ワケサー (WAKESER) と命名。現在も稼働中

McAUDI / MAD62
モニターデバイダー。2-Way、6系統のクロスオーバー。ハイエンドブーストが画期的。ローブーストもあった。現在も稼働中



McAUDI / MDP4002
MAD2005と接続して使用するために開発されたデジタル音場解析機。会場の音場をリアルタイムで調整するために必要な機能をひとまとめた。当時としては画期的な装置。LAKEの登場により、運用を終了した

TANNOY / SYSTEM-12
ラージモニタースピーカー。ODYSSEYに搭載。車に搭載可能かつ、同軸型で定位の良いラージスピーカーだったため導入。ネットワークや吸音処理の変更などODYSSEYに合わせてカスタマイズを施した



コンサート音響の機材史

コンサート音響の機材史

赤字…自社開発機材

1995

スピーカーシステム
ヒビノ / NBIIシステム
 NBのバージョンアップモデル。すべての帯域に新しいユニットを採用するとともに、コンパクトに改良。Lowボックスを18インチウーファー×2に変更。大規模システム用ロングスローボックス（2インチドライバー×4、スーパーツイーター×16）も加わり、スタジアム公演等で使用。現在も稼働中



1996



YAMAHA / PM3500M
 YAMAHA初のモニター専用コンソール。毎年、夏のイベント等で使用しており、現在も稼働中

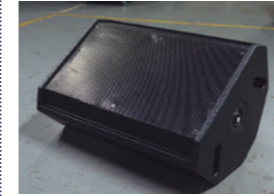
1997

NEXO / PS15
 プロセッサーを使うモニタースピーカーを初めて導入。とにかく世界中によく売れたモデル。この高音用ホーンで非対称指向性コントロールを学ばせてもらった思い出のスピーカー。現在も稼働中



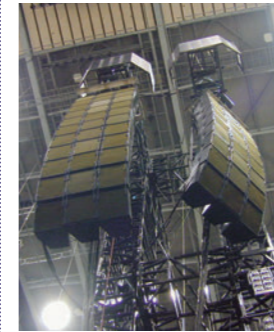
1998

ヒビノ / 1251
 ボーカル用に小型のモニタースピーカーが必要となり製作した、ヒビノオリジナルモニタースピーカー。JBL12インチウーファー（初採用）×1、2インチドライバー×1、スーパーツイーター×1で構成。フライング機構を導入。現在50本稼働中



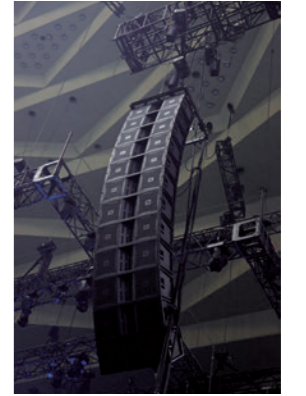
1999

ヒビノ / NBIIIシステム
 ヒビノオリジナルスピーカーシステム。LowとHighの2ボックス構成。同シリーズとしてSub Lowボックスも開発。18インチサブウーファー×1のSub Lowボックス、18インチウーファー×1のLowボックス、10インチMid×4、2インチドライバー×2のHighボックス。当時フライングに対応していたSub Lowボックスは画期的だった。「GLAY EXPO '99 SURVIVAL」に間に合わせるために、何十泊も徹夜続きで開発した。デビュー後、3回バージョンアップを図っている。現在も稼働中



2000

JBL PROFESSIONAL / VerTecシリーズ
 JBLがV-DOSCに対抗するために世に出したラインアレイスピーカーシステム。このキャビネットの軽量化技術は現在の航空機技術に通じるものがあり、JBLの本気度合を感じさせる。現在200本稼働中



AMEK / 501 by Langley
 AMEKから登場した新たなブランドLangleyのコンソール。24in. 1台のみ導入し大阪営業所で運用していた

AMEK / RECALL by Langley
 コンピューターでコントロールが可能なシーンメモリーとVCAのコントロール機能を搭載していたのが特長。56in. 音質に定評あり。インプットモジュールのVCAを利用したバーチャルダイナミクスが好評だった。アナログ卓でありながら、PCでバーチャルダイナミクスをコントロールするさまは、デジタルの走りのようなイメージ。ルパート・ニープ設計のインプットモジュールが好評だった。2013年5月まで現役機として活躍

YAMAHA / PM3500
 PM3500Mのハウスバージョン



Soundcraft / Series FIVE
 モニター用、ハウス用を所有

YAMAHA / O3D
 ヒビノが導入した初めてのデジタル・ミキシングコンソール。入出力はアナログ信号。ムービングフェーダーに感動



Soundcraft / SM20
 小回りの利くモニターコンソール。32ch×1台、40ch×1台、48ch×4台が現在も稼働中

MIDAS / H2000
 アナログ・ミキシングコンソール。MIDASサウンドのファンは国内外で多く、海外アーティストからの要請により導入

BSS AUDIO / FDS-388
 BSS AUDIOとして初のデジタルプロセッサー。BSS AUDIOのアナログデバイダーの後継機として導入。LAKEの登場により、運用を終了した

800MHz帯リニアワイヤレスシステム
 SONYの800MHz帯リニアワイヤレスシステム導入



BSS AUDIO / FDS-355
 OMNIDRIVE、3入力、6出力構成。NBII用スピーカーマネジメントプロセッサー

A帯・B帯ワイヤレスイヤーモニター
 SENNHEISERのA帯・B帯ワイヤレスイヤーモニター導入。その後、Shure、MIPROも続々導入



BSS AUDIO / FDS-366
 FDS-355の後継機。VerTecシリーズ用スピーカーマネジメントプロセッサー。LAKEの登場により、運用を終了した

TASCAM / DA-88, DA-38
 8トラックのデジタル・マルチトラックレコーダー。チャンネル数は少ないがPCM-3348よりコンパクトで、外部Sync、TCの入るデジタルレコーダーとして、主に仮設録音で活躍

●1998
TASCAM / DA-88, DA-38
 8トラックのデジタル・マルチトラックレコーダー。チャンネル数は少ないがPCM-3348よりコンパクトで、外部Sync、TCの入るデジタルレコーダーとして、主に仮設録音で活躍

STUDER / 962
 コンパクトなアナログ・ミキシングコンソール。仮設録音のモニターコンソールとして導入。クオリティが高く、当時、コンパクトミキサーでは筆頭だった。現在も稼働中

Digidesign / Pro Tools 24MIX
 デジタルオーディオワークステーション。Pro Toolsが24bitになったのをきっかけに導入。ライブレコーディングに採用したのは日本初。コンピューターはMac OS9、ドライブはSCSI、HDDは10GB×10台だった

ヒビノ / マイクプリアンプ
 ヒビノオリジナルの16chマイクプリアンプ。多チャンネル型のHAが出回っていなかったため、ライブレコーディングに特化したオリジナルHAを製作。録音中継車が入れない現場で運用可能な仮設録音システムとして活躍。3台製作し現在も稼働中

SONY / R100
 過搬型のデジタル・ミキシングコンソール。SONYが誇るOXFORDデジタルミキサーの技術がふんだんに取り入れられているハイクオリティなコンソール。コストパフォーマンスも抜群だった

2001

スピーカーシステム

NEXO / PS8
リップフィル用に導入したスピーカーシステム



YAMAHA / PM1D
ヒビノが導入した初めてのデジタル伝送を可能としたデジタル・ミキシングコンソール。デジタル信号の出力が可能。現在も稼働中

MIDAS / H3000
アナログ・ミキシングコンソール。海外アーティストからの要請により導入。AUXの数が多いため、モニターコンソールとしても利用

XTA / DP224
VerTecシリーズ用スピーカーマネジメントプロセッサ



ワイヤレスシステム、その他

録音

●2001
ヒビノ / レコーディングスタジオ(白金)
フルデジタル・レコーディングスタジオを開設。Pro Toolsを核としたシステム構成で、録音からトラックダウン、マスタリングまで一貫制作を可能とした。レコーディング業界はまだアナログ全盛の時代だったが、一部の国内アーティストやすでにDAWを使い始めていた海外アーティストが訪れた。同スタジオは、2009年に本社へ移設



EML
ラージモニタースピーカー。スタジオに導入。タイムアラインを最初に提唱したメーカーが製作したスピーカー。解像度が高く、本社のStudio Aで現役稼働中



YAMAHA / DM2000
メインコンソールとバックアップコンソールを簡単に同期させることができるのが特長。安定感があり壊れない。のちに、YAMAHA専用の光伝送システムを導入。長距離伝送が必要な国体等の現場で活躍中

MIDAS / VENICE
20in、4outの小型アナログ・ミキシングコンソール。抜群の信頼感でトラブルフリー。現在もサブやバックアップ用途で活躍中

MIDAS / H1000
アナログ・ミキシングコンソール。H2000やH3000に比べて軽量が特長。ホールコンサート用に1台導入



NEXO / GEO S
小型ラインアレイスピーカーシステム。設備用をツアーリング仕様に変更



2002

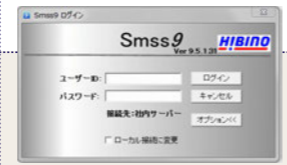
NEXO / GEO T
この形状を言葉で伝えることはできないほどユニークなデザインのラインアレイスピーカーシステム。キャンセリング技術を広めることに役立った。小口径ウーファの可能性を実感したシステム。現在150本稼働中



CAMCO / Vortexシリーズ
GEO Tの指定パワーアンプ。エネルギー変換効率が高い。スイッチングレギュレーター採用アンプ。100Vは日本仕様

LAKE Contour (MESA EQ)
スピーカーマネジメントシステム。従来のEQとは違い、線を描くように無限にEQコントロールができる点が画期的

ヒビノ / SMSS
スタッフのスケジュールをマネジメントする社内システム



2004

AMCRON / I-Techシリーズ
ユニバーサル電源を搭載したパワーアンプ。DSPを搭載したアンプをPCに接続することで、今までにない細かいコントロールが可能になった。このアンプの出現であらためて電源のコンディションについての理解が要求されることになった



DiGiCo / D5
100chを超えるインプット数に対し、驚異的なコンパクトさと軽量化を実現。オプトコア社の光伝送システムの採用により設置時の労力が大幅に軽減。完全なリダントが特長。音質は抜けが良く、かつ力強い。ミックスしても音が崩れないことに驚かされた。Dシリーズは、交換プログラムによりすべてSDシリーズに変更しており、現在は使用していない

CAMCO / SCタワー
CAMCO製小型タワー。GEO Sを吊り、ホールで運用したところ大好評。現在も稼働中

YAMAHA / PM5D
モニターコンソール。そのクオリティ、価格により日本中のPA業者が導入している。現在もモニターコンソールとして稼働中



●2004
Digidesign / Pro Tools HD2 Accel
Pro Toolsを24MIXからHD2 Accelにバージョンアップ。I/Oも刷新。スタジオ及びODYSSEYの全システムを入れ替えた。業界全般的にメインレコーダーがPCM-3348からProToolsに移行した時代

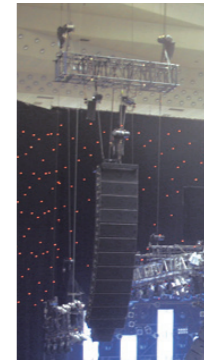
Digidesign / ProControl
Pro Toolsのコントロール・サーフェス。スタジオに導入

●2005
ヒビノ / レコーディングスタジオ(港南)
レコーディングスタジオを白金から本社(港南)へ移設。Studio A、Studio Bの2室を開設。5.1chサラウンドミックスに対応した

Digidesign / D-Command
Pro Toolsのコントロール・サーフェス。Studio Aに導入。5.1chサラウンドミックスに対応した

2006

L-ACOUSTICS / V-DOSC
世界初のラインアレイスピーカーシステム。海外アーティストのニーズにより導入。L-ACOUSTICS社(フランス)と日本における「V-DOSC」運用に関するパートナー契約を締結。現在108本稼働中



YAMAHA / M7CL
コンパクトなミキシングコンソール。イベント用途(企業イベント、式典等)に最適。一人でも持てるほど小型、簡単な操作性、ノートラブルという理由から人気が高い。現在も稼働中

Soundcraft / Vi6
Soundcraftで初のデジタル・ミキシングコンソール。Lexicon PROのエフェクターを内蔵。ハウス用でもモニター用でも使用できるが、ボーカルの中域がしっかり出ることから、主にモニターコンソールとして運用。現在もPM5Dと並んで主流のモニターコンソールであり、人気は二分されている



GENELEC / 8040A
モニタースピーカー。Studio A・Bの5.1chサラウンド用モニターとして導入。調整がしやすく当時のスタンダードスピーカーだった

Avid / Pro Tools HD3 Accel
Pro ToolsをHD2 AccelからHD3 Accelにバージョンアップ。カードのエンジンが強力になりプラグインが多く差せるようになった

Focusrite / ISA 828
マイクプリアンプ。仮設組み録音の需要が高まり、ハイクオリティで入力インピーダンスを可変できるHAを導入

2007

スピーカーシステム

ヒビノ / ALAKAI
ヒビノオリジナルモニタースピーカー。JBL12インチウーファー×2、1.5インチドライバ×1で構成。ハイブリッドバツフル板、テンションバーは画期的。ALAKAIはハワイ語で“伝える”という意味の単語。現在64台稼働中



2008

JBL PROFESSIONAL / SRXシリーズ
小型軽量モニタースピーカー。十分な音量を確保でき、かつ安価。大量に導入。現在136台稼働中



JBL PROFESSIONAL / VRX900シリーズ
小型軽量ラインアレイスピーカーシステム。大会場のフォロー用、ニアフィル用などに最適。小規模イベントではスタンドを用いた設置も可能で幅広い用途で重宝している



2009

L-ACOUSTICS / KUDO
左右非対称指向性コントロールができるラインアレイスピーカーシステムとして画期的だった。壁の反射を減らしながら指向性を広げることが可能なため、アウトサイドのスピーカーとして最適



2010

L-ACOUSTICS / K1
V-DOSCの後継機で、大規模コンサート向けのラインアレイスピーカーシステム。現在160本稼働中

L-ACOUSTICS / KARA
K1と同時期に開発されたフォロー用に最適なラインアレイスピーカー。K1を使用する際はKARAを組み合わせたことが多い。現在96本稼働中

CODA AUDIO / CUE FOUR
不思議な指向特性を持つモニタースピーカー。高さを抑えた設計がライブステージに最適。価格も安価。ユニット構成と出音のギャップに驚かされた。現在240台稼働中

Lab.gruppen / PLM 10000Q
LAKEが搭載された4chパワーアンプ。モニターシステム用に導入。すべてPLM 20000Qに移行済み

2011



2012

JBL PROFESSIONAL / VTXシリーズ (VTX-V25)
VerTecシリーズの後継機に当たるラインアレイスピーカーシステム。デュアルダイアグラム、デュアルコイルのユニットを採用し高出力を実現。現在84本稼働中



AMCRON / I-Tech HDシリーズ
VTXシリーズの指定パワーアンプ。BSS AUDIOのDSPを搭載。ユニバーサル電源対応が特長。パフォーマンスマネージャー（コントロールソフト）の併用で、システム全体のコントロールが簡単にできる。現在I-T12000HDが276台、I-Tech 4x3500HDが52台稼働中

Lab.gruppen / PLM 20000Q
LAKEが搭載された4chパワーアンプ。ユニバーサル電源に対応したため、PLM 10000Qから買い替え。すべてのモニターシステム用に導入中。現在170台稼働中

Soundcraft / Si Compact
コンパクトなミキシングコンソール。Lexicon PROのエフェクターを内蔵。ホテル等での小規模なイベントに対応するために導入

DiGiCo / SD10
SD7に先行してワードクロックが96kHz対応となったモデル。導入時はハウス用途で使用、現在はモニターコンソールとして稼働中

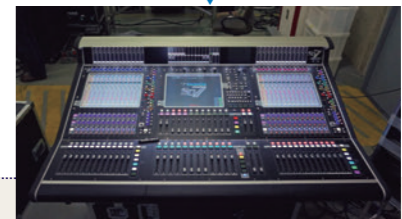
MIDAS / PRO9
時代の流れに合わせてサーフェスを小型化。安定した動作。マイダサウンドは健在



Soundcraft / Vi1
Viシリーズの使い勝手を考慮した小型版。本体にアナログインプットが付き、利便性が向上。中規模なイベントに対応するために導入

Soundcraft / Si Performer
Si Compactの進化版。小規模なイベントに最適

DiGiCo / SD7
あらゆる需要に応えられるDiGiCoのフラッグシップモデル。ワールドスタンダードに対応。大規模コンサートに最適。ワードクロックが96kHz対応となり導入



A帯・B帯デジタルワイヤレスシステム
SONYのA帯・B帯デジタルワイヤレスシステム導入。クリアな音質が好評だったが、ヘッドの交換が不可のためアーティストを選んだ（好みが分かれた）



2007

ミキシングコンソール

Digidesign / VENUE
ライブとレコーディングをトータルで考えられるシステムとして画期的。トラブルが少なく、DigidesignのPro Toolsのプラグインと互換性があることから、世間で人気の高いコンソール

MIDAS / XL8
MIDAS初のデジタル・ミキシングコンソール。マイダサウンドを好む人に好評

DiGiCo / SD8
Dシリーズの欠点であった、インプットのコンプレッサーの使い勝手や、内蔵エフェクターの品質が大幅に改良。価格が手頃だったことや、Dシリーズからの切り替えはサーフェスのみの導入でI/Oラックは流用が可能だったため、容易に移行できた。現在も主力のハウス用コンソール



2008

ワイヤレスシステム、その他

TX3000H電源トランス
商用電源のCold（マイナス）側に流れるノイズ成分を2次側（機材）に影響しないようにするため、フローティング電源トランスを各チームに配布

ヒビノ / dBird
機材スケジュールを管理する社内システム。SMSSの情報を自動的に取り込む



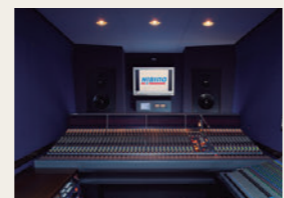
2009

録音

ヒビノ / ODYSSEY 2
ヒビノオリジナルの大型録音中継車。初代ODYSSEYはまだ現役で稼働できたが、自動車排出ガス規制の問題により新型車両を製作しリニューアルした。初代の高スペックを踏襲しつつさらなる録音環境を追求。油圧リフターや防振対策も徹底。基本システムにPro Tools HD3 Accelを搭載した



ADAM / S4VA MK2
ラージモニタースピーカー。スタジオクラスの解像度を目指してODYSSEY 2に搭載。新たな内装設計に加えてアクティブデバイダーを搭載し、車の走行振動や経年変化によるモニター環境の変化に対する調整を行えるようにした



コンサート音響の機材史

赤字…自社開発機材

2013

2014

スピーカーシステム

Martin Audio / MLA

ソフトウェア「ディスプレイ2」により、世界に先駆けて、結果から原因を導き出し、希望どおりの音場が得られるマルチセルラースピーカーシステム。「音場の最適化」を特長とする。小規模から大規模コンサートまで対応可能。現在100本稼働中



L-ACOUSTICS / K2

K1のテクノロジーを利用し小型化したラインアレイスピーカーシステム。吊り重量の制限を求められるセンターステージなどの現場で好評



Speaker System

ミキシングコンソール

MIDAS / PRO2

PRO9をさらに小型化。使い勝手が良く、ハウス用でもモニター用でも好評



Mixing Console

ワイヤレスシステム、その他

Antelope / 10M + Trinity

高精度なルビジウム・マスタートラック。主にスタジオのマスタートラックとして稼働。音の良さは、次元の違いを感じるほどだった。よりいっそうのハイクオリティを目指し導入



1.2GHz帯デジタルワイヤレスシステム

SONYの1.2GHz帯デジタルワイヤレスシステムを試験導入。送信機一つで全国で運用可能。高い周波数帯で安定した運用ができるか今後に期待

ホワイトスペース(WS)帯デジタルワイヤレスシステム

SENNHEISERのホワイトスペース (WS) 帯デジタルワイヤレスシステム初導入。全国での運用は送信機が複数必要

録音

Antelope / Orion32

32chのAD/DAコンバーター。1Uサイズとコンパクトながら32chかつMADIインターフェースに対応。音が良く、スタジオ及びODYSSEYの全システムに導入

ヒビノ / MADIC

ヒビノオリジナルのMADIに特化したコンパクトかつハイクオリティな録音システムを構築。最高192kHz / 32bitの同時録音が可能。DAWIは、Pro Tools HDXに加えNuendo 6をラインアップした

Avidから初登場したMADIインターフェースを採用した。ルーティングも含め導入力を一元化

YAMAHA / Nuendo 6

デジタル・オーディオワークステーション。業務用DAWとして音質に定評がある。DAWの幅を広げる意味でも導入を決定

Avid / Pro Tools HDX

Pro ToolsをHD2 AccelからHDXにバージョンアップ。アナログインターフェースを見直し、MADIインターフェースへ統一。

Recording

HIBINO 50th ANNIVERSARY

資料編